

マルクス主義思想の危険について

西 谷 幸 介

はじめに

1 マルクス主義思想の6つの要点

カール・マルクス 1818 - 1883

プロメテウスのヒューマニズム

疎外される労働（労働の疎外）

民衆の阿片としての宗教

唯物史観（史的唯物論）と階級闘争

剰余価値と搾取

プロレタリアートによる共産主義革命

2 マルクス主義思想のどこが危険なのか

ヒューマニズムの倫理的理想主義

プロレタリアートの革命的独裁

階級および国家の止揚

プロレタリアート独裁→共産党独裁→個人独裁

共産主義の構造的悪に対する憲法による保障

おわりに

はじめに

本稿は、筆者が青山学院大学国際政治経済学部「宗教文化論」において、また専門職大学院国際マネジメント研究科「エシックスとビジネス」において行なった、「マルクス主義思想」に関する講義の内容をお伝えするものである。定年退職後の非常勤講師にも提供されるこの『青山スタンダード論集』への投稿の機会に感謝し、前号では筆者の「キリスト教と人権および近代民主主義」に関する講義内容を敷衍し研究論文として掲載して頂いた。同じ伝で今号ではマルクスの思想に関する講義内容をお伝えしたいのだが、今回はその内容そのものの紹介に近く、専門家からすれば大半はマルクス主義に関する通論的

内容でもあり、研究論文と言うには心苦しい感じが否めないでいるが、前号の「人権および近代民主主義」に続く今号のこの「マルクス主義思想」という主題の選定には現在の世界状況に鑑みた私なりのキリスト教社会倫理的判断があり、こうした体裁でもあえて投稿させて頂きたいと思った次第である。その点をご理解頂き、ご寛恕頂ければ、幸いである。

表題を「マルクス主義思想の危険について」としていることから筆者の判断がこの思想に否定的であることは容易に察して頂けようが、とりわけどの点[・]が危険だと判断する[・]のか、それを学術研究の視点からお伝えしたいと思う。マルクス主義が共産主義の思想的支柱であることは論を俟たない。そして、共産主義は中華人民共和国の他数ヶ国で現在も実践に移されており、その中国は、人口は世界人口の五分の一近く、14億人になんなんとし、経済的には驚異的な発展を遂げてきた。そして、この経済力をもって世界の諸国家にその政治的影響力を行使しようとしている。しかし、その政治体制は自由民主主義体制とは明白に異なる。従って、そうした中国をはじめとする共産主義諸国家とどう付き合い、どう渡り合っていくかということは、自由民主主義諸国民にとってきわめて重要な課題である。都内の大企業でビジネスパーソンとして相当な経験を積んだ「国マネ」（通称、青山ビジネススクール）のフレックスタイムの学生が興味津々でこの講義に傾聴している所以である。

ただし、その平均的感想は、中国にはビジネスの関係で往来もし、その国柄には普段から関心を抱いてきましたが、詳しくはわかっていませんでした、ましてやこんな思想的背景があり国家制度があったとは知りませんでした、といったものである。これが平均的なので驚きなのだが、そこにこうした講義の必然性も確かめられよう。またこの講義は国マネの近年増加してきたフルタイムの中国人留学生も聴講している。母国で教わったのとはおよそ異なる雰囲気の中でマルクス主義の要点について聞いてもらうことに、大いに意味があると考えている。

1 マルクス主義思想の6つの要点

そこで、筆者の講義内容に入っていくが、以下のように、まず、カール・マルクスの簡潔な紹介の後、マルクス主義思想を6つの要点に絞り説明している。

カール・マルクス 1818－1883 19世紀のユダヤ系ドイツ人哲学者・経済学者・革命家。裕福な弁護士の父はおそらく職業上の理由からキリスト教徒に改宗し、マルクスも6歳で受洗した。16歳からボン大学、ベルリン大学等で学び、ヘーゲル哲学の「弁証法」的思考を身につけ、B・バウアーらによるキリスト教への歴史批評学からの批判に同調。青年時代、産業革命のドイツへの悲惨な影響を目撃。1842年、反政府的な『ライン新聞』の主筆となり、貧民問題や社会問題、経済問題を取り上げ、プロイセン政府に追われ、45年、パリからブリュッセルに逃れた。その頃、ヘーゲルの観念論を否定し彼の弁証法の社会革命への唯物論的適用を志向した、同じ「青年ヘーゲル学派（左派）」のドイツ人思想家・革命家F・エンゲルスと意気投合。48年、エンゲルスと共に『共産党宣言』を発表。翌年、イギリスに亡命した。64年、「第一インターナショナル」（「国際労働者協会」）設立に挺身、指導者となる。64歳で病没。

ここでは、マルクスの主要な著作の解題と、その父がマンチェスターで工場経営に成功していたエンゲルスが親友マルクスを経済的に支えたことなども、付け加える。最近、マルクスとエンゲルスを描いた映画が発表された。大いに参考になる映画である。

プロメテウスのヒューマニズム マルクスの哲学は徹底して「人間の哲学」であり、そこに深いヒューマニズムが確かめられると言われる。それを象徴する言葉として引用されるのが、学位論文「デモクリトスとエピキュロスの自然哲学の相違」中の最後の以下の下りである。マルクスはこの論文をイェナ大学に提出し、1841年、哲学の学位を取得した。

「プロメテウスの告白、

端的に言えば、すべての神々を私は憎む。

この告白は哲学自身の告白であり、人間の自己意識を最高の神性とは認め

ないすべての天上および地上の神々にたいする、哲学自身の宣言である。

.....

プロメテウスは哲学の年鑑のなかの最も高貴な聖者であり殉教者である」¹。

マルクスは娘の問いに、自分の英雄はプロメテウスだ、と答えている。ギリシア神話における半神半人プロメテウスは自ら創造した人類を友と見てこれに天上の火を盗み与えたが、それによりゼウスの怒りを買ひ、罰せられた。しかし、プロメテウスはゼウスが恋する女神テティスの子は父ゼウスを凌駕するという秘密を知っていた。マルクスはこの「秘密」という語を、プロレタリアートのみが知る資本主義社会の転覆をもたらす「秘密」に準え愛好した。マルクスは神からさげすまれた人類にプロレタリアートを見出し、その味方であり続ける者を自任したのである。

このマルクスのプロメテウスに仮託されたヒューマニズムが第1の要点であるが²、初期マルクスにおいてはこれがとりわけ虐げられた労働者たちへと向けられた。そして、そこで彼が刮目すべき概念として掲げたのが「疎外される労働」であった。

疎外される労働（労働の疎外） 以下はすでに1844年に記されていたがその後発見されようやく1932年に公刊された初期マルクスの『経済学・哲学手稿』からの1節である。これが一般にも注目されるようになったのは各国語に翻訳された1960年代であった。

「労働者は商品を作れば作るほど、それだけ安価な商品となる。…労働はただ商品を生産するだけではない。それはそれ自身と労働者を一つの商品として生産する。…それは、労働が生産するところの対象、労働の産物は労働にたいして一つの異物として、生産者からは独立な一つの力として対峙してくるということにはほかならない。…労働のこの現実化は…労働者の現実性の喪失、対象化は対象の喪失および対象への隷属、そして獲得は疎外として…あらわれる」³。

マルクスはベルリン大学時代にヘーゲルに触れ、その弁証法的思考を身に付

けた。ヘーゲルの主著『精神現象学』（1807年）によれば、哲学の本来の主題であり対象である「精神」（Geist, spirit = 聖霊）は、自己のうちから自己でないものを創造し、その自己でないもののうちへと歩み出て、自己に向かい合う。そして、さらに、より高い自己へと発展し、自己を総合していく。これがいわゆる「正（These, an sich）→反（Antithese, für sich）→合（Synthese, an und für sich）」と定式化される弁証法である。「弁証法」とはギリシア語では、元来、「二者間の対話」という意味だが、プラトンでは事物の本質を概念的にとらえるための方法とされ、ヘーゲルでは思考と存在を貫く運動・発展の論理とされた⁴。そこにキリスト教神学の三位一体論の影響を認めないことは困難であろう。

ヘーゲルは人間の労働もこの「弁証法」によって理解する。すなわち、労働（者）は自己のうちから自己でないものを生産し（自己外化、自己対象化）、この生産物に自己を創造し形成したという自覚をもちつつ、その自己に向かい合い、さらに、それにとらわれることなく、より高次の自由な自己創造に向かうのである。マルクスは、労働理解において根本的に以上のヘーゲルの労働概念に依拠しつつ、しかもその中の一局面のみを強調した。すなわち、労働（者）による生産物および貨幣から労働（者）自身が「疎外」されてしまうという側面である。これは、ヘーゲル理解としては一面的ではあるが、初期工業社会の過酷な労働状況では、労働者たちにとってはきわめて啓蒙的で魅力的な主張であった。

「疎外される労働」の説と同時期にマルクスにより提起されていたのが、痛烈な宗教批判、つまりはキリスト教批判であった。

民衆の阿片としての宗教 マルクスは、1841年に『キリスト教の本質』を著わした哲学者L・フォイエルバッハが、理念（＝精神）がすべてに先立って存在する最も根本的なものであるとするヘーゲルの観念論を逆転させさえすれば、人間のすべての問題は解決される⁵、と主張したことを高く評価していた。マルクスにとって、フォイエルバッハはヘーゲル左派としてこのようにヘーゲルを批判することにより真実を発見した無二の哲学者であった。そして、フォ

イエエルバッハがそれを顕著に展開したのがその宗教論であった。すなわち、ヘーゲルの「外化」概念を「投影」概念に置き換え、「神」観念とは、人間が自身の最高の類的可能性を「神」という外的な表象に「投影」したものすぎない、と論じたのである。すなわち、宗教は人間の虚空への自己投影による観念的産物の最たるものなのである。

この宗教批判を全面的に受け入れ、マルクス自らが1844年の『ヘーゲル法哲学批判序説』にしるしたのが、以下の有名な言葉である。

「宗教は、人間存在が真の現実性をもたない場合に起こる、人間存在の空想的な現実である。…反宗教批判の根本は、人間が宗教をつくるのであって、宗教が人間をつくるのではない、ということである。…宗教は悩める者の溜息であり、心なき世界的心情であり、精神なき状態の精神である。宗教は民衆の阿片である。…宗教の批判は法の批判に、神学の批判は政治の批判に代わる」⁶。

筆者自身が以上の説を翻案して学生に伝えている説明が以下である。すなわち、マルクスによれば、宗教はあたかも麻薬のようなものであって、人間の病巣を突き止めて治療する真の薬ではなく、病そのものは放置したまま、病にかかっていないかのような錯覚による幸福感を与えることにより、人間を欺く代物である。

フォイエエルバッハがヘーゲルの観念論を逆転させさえすれば人間のあらゆる問題は解決されると述べたとき、彼が考えていたのはヘーゲルの哲学的標語「理念的なものは現実的であり、現実的なものは理念的である」に含意された現実的なもの・物質的なものの理念的なもの・精神的なものに対する優位化であった。これを徹底したのがマルクスの唯物論であり、人類史の唯物論的見方すなわち唯物史観とそこから必然的に導き出された階級闘争論である。

唯物史観（史的唯物論）と階級闘争 以下はマルクスの唯物論を決定的な仕方 で表現した1859年の『経済学批判』からの有名な一節である。これはまた『資本論』第一部第一章にも記されている。

「物質生活の生産様式が、生活の社会的、政治的および精神的過程一般を

規定する。人間の意識が人間の存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである』⁷。

こうして、マルクスによれば、人間の存在を決定するのは、その意識の産物としての観念ではなく、物質的生産をめぐる人間相互の関係である。社会の真の土台はこの生産関係の総体すなわち経済構造である。人間社会は政治や法律の制度を造り上げ、宗教や倫理や芸術などの社会的意識形態すなわち「上部構造」をもつが、それらの観念形態は、生産における「分業」に由来する「階級」と呼びうる社会的経済的立場の反映であり、もっぱら支配階級の立場を正当化する「イデオロギー」であることが多い。それは根本的には経済構造により左右されるものである。

さらに、マルクスによれば、人類の生産力は発展増大してきたが、それは社会の既存の生産関係およびその法的表現にすぎない所有関係に必ず矛盾する時点に達する。この時、一つの社会革命が始まる。従来、社会の経済構造の段階としてアジア的、古代的、封建的な生産関係が存在してきたが、現在の近代市民社会の資本主義的な生産様式は人類社会の生産関係の最後の敵対的形態（ブルジョワジー対プロレタリアート）である。しかし、最終的には、プロレタリアートによる生産力はブルジョワジーの社会支配を覆し、この敵対関係を解消するほどに増大する。その時、プロレタリアートによる理想的な共産主義社会が実現する。

この辺りから、よく指摘されるマルクスの科学的客観主義と倫理的主体主義との混同が始まっていると言わざるをえないが、以上の理論を強化する剰余価値とその搾取の説をも同時に見ておかねばならない。

剰余価値と搾取 マルクスは、アダム・スミスにおいてはまだ十分に着目も分析もされていなかった「資本」の近代市民社会の経済における主導的機能を強調し、その生命を「利潤追求」と見た。「資本」は単に「貨幣」ではなく、貨幣資本→生産資本→商品資本→貨幣資本と循環するものであり、この循環の背後にあるその本質は人が生産において取り結ぶ特定の関係なのである。スミスによればこの関係は資本家と地主と労働者の三階級により結ばれたが、マルク

スでは上に見たごとくもっぱら資本家と労働者の二階級の関係に絞られる。

ところで、マルクスによれば、利潤の本質とは「労働力の搾取」に他ならない。すなわち、人間の労働力は商品自体を生産するのに必要とされる以上の価値を生産しうる、あるいは、賃金として受ける対価以上のものを生産しうるものである。この人間の労働力がもたらす「以上のもの」をマルクスは「剰余価値」と名づけた。そして、資本主義社会ではこの「剰余価値」を資本家が私有すなわち「搾取」してしまうのである。スミスは、交換される生産物に加えられた労働は等量であるべき、すなわち等量の労働（生産物）と等量の労働（生産物）とが交換されるべき、としたが（いわゆる「等価交換の法則」）、マルクスはこの「労働価値説」の観点から、資本主義体制は根本的矛盾を抱えており、その解決はプロレタリアートとしての労働者階級による経済体制の支配によって達成される、と考えたのである。

ここから、共産主義理想社会を実現するためのプロレタリアートによる社会革命の説が説かれる。

プロレタリアートによる共産主義革命 マルクスによれば、プロレタリアートが理想的な共産主義社会をもたらしうるのは、彼らがこの社会の到来が科学的にも証明されうる歴史的な必然であることを認識し、かつ、彼ら自身がこの到来を生起させうる革命行動の主体であることを自覚し、革命を実践するときのみである。ここにマルクスによる科学的経済学的客観主義とプロレタリアートに託された倫理的主体主義との混同が極みに達する。

さて、その社会が到来した暁には、「市場経済」ではなく、社会的必要にのみ従う「計画経済」が行なわれ、商品の「物神性」を醸し出す「交換価値」の実体はなくなり、「使用価値」のみが生産過程を支配する。労働時間は社会的必要の最低限に短縮され、各人の精神を豊かにするための「余暇」が与えられる。こうして、社会全体が生産過程を支配することにより、生産物が人々を支配するような人間の「物象化」や「疎外」は止揚されるのである。

これはトマス・モアの『ユートピア』（1516年）を彷彿とさせる説であり、そこでは文字どおりユートピア的幻想主義が支配している。

2 マルクス主義思想のどこが危険なのか

以上が筆者が講義でマルクス主義思想を解説する際の6つの論点である。そして、その上で、この思想に対する筆者の批判的見解を提示することになる。その根本的視点は、以上の『ユートピア的幻想』が不当な「権力独占」を正当化し、その抑止をまったく不可能としてしまう、共産主義体制の危険、ということである。

ヒューマニズム的倫理的理想主義 マルクスは、ゴータで発表された当時のドイツ社会主義労働者党の綱領を批判した『ゴータ綱領批判』(1871年)で、共産主義社会を以下のように二段階に分け、区別した。すなわち、

(1)「生まれたばかりの共産主義社会の第一段階」

(2)「共産主義社会のより高度の段階」

さて、これら二段階を以上のごとく便宜上(1)、(2)とすると、マルクスが(1)と(2)の区別に込めた意味はこうであった。すなわち、(1)では、個人への給付はその労働に比例する。そこでは個人の権利は労働(量)という平等の尺度で測られるからである。これは、商品交換の場合、一つの形の労働が別の形の等しい労働と交換される、という原則と同じである。しかし、問題は、(1)が「労働者の不平等な個人的天分と、したがってまた不平等な〔被〕給付能力を、生まれるながらの特権として暗黙のうちに承認している」社会であり、それは「ブルジョワ的な制限につきまといわれている」状態であって、実際、そこでは「ある者は他の者より事実上多く受け取り…他の者より富んでいる」。しかし、これは「長い苦しみののち資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会」では致仕方のないことなのである(のちにレーニンはこの社会を「社会主義社会」と呼んだ)。

しかし、そのままでは(2)は実現しないゆえに、この社会を過渡期として、共産主義理想社会の実現に邁進せねばならない。では、(1)から(2)へ到達するための指標、「ブルジョワ的権利の狭い限界を完全に踏み越えた」理想社会の在り方とは何か。

ここでマルクスはかの有名な標語を宣言する。すなわち、

「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！」⁸。

ただ、この標語もそのままでは意味を解せないゆえに、筆者なりにそれを補えば以下のごとくである。すなわち、共産主義理想社会においては、

「各人はその能力に応じて働き、各人にはその必要に応じて給付される」。

下線部が補った言葉であるが、この宣言において何と言っても重要なのは「必要に応じて」という傍点の部分である。ここに理想社会を実現するためのマルクスのヒューマニズム的倫理的理想主義が打ち出されている。すなわち、社会的な富に対する各人の持ち分は、持てる者が「必要」を基準として持つことにより、不必要な分を持たざる者に還元することによって、能う限り平等を実現するということが、目指されるのである。

筆者自身はこの下りを翻案して学生には以下のように伝えている。つまり、マルクスは、新約聖書の「タラントンの譬」のように、各人の「生まれながらの特権」を一旦は認めるが、それでは不十分として、万人の平等という理想を目指すため、とくに持てる者が「必要」に応じてのみ得る、という倫理的指標を社会に課するのである。すなわち、5タラントンの賜物を託された者がそれを元手にもう5タラントンを得ても、自らの生活のためには例えば3タラントンのみを残し、あとの2タラントンを、2タラントンの2タラントンを得た者に、あるいは1タラントンの1タラントンも得なかった者に、分配するためである、と。

しかし、この倫理的理想主義は追考熟考すればきわめて甘い楽観主義、人間に対するきわめて脇の甘い楽観的な見方であることがわかる。とくに持てる者の持続する社会心理的不満を考えれば、この理想主義が現実にはいかに有効には働かず継続困難かということ、そしてそれはまず持てる者の労働意欲の減退をもたらすということは、容易に察しのつくことである。能力100の者の生産100に対して、彼になされるべき給付100が絶えず50に据え置かれ、残りの50が持たざる者に還元されてしまえば、彼の生産性が低下し続けることは自明の理である。また、持たざる者に対する継続的な経済的支援が公的社会保障制度として正当化されれば、これもまたその社会的上昇意欲を停止させ、生

産性の低下を招くのは自明の理である。要するに、持てる者も持たざる者も、その財布は絶えず薄っぺらさの度合いを増していく、ということなのである。これが1917年10月の革命をもって始まり1991年12月には解体せざるをえなかったソヴィエト社会主義共和国連邦の運命であった。

こうした運命を見通すこともなく、マルクスは共産主義理想社会実現のためにさらに「プロレタリアート独裁」を宣言する。これが問題の根源であった。**プロレタリアートの革命的独裁** 先の理想主義的標語の宣言の後、マルクスはその後の共産主義国家の法的構造をも決定づける次のような政治的宣言を行なった。

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもありえない」⁹。

この時点でマルクスはこのプロレタリアートによる政治的権力の独占がその後の共産主義社会で継続する権力の集中化構造をもたらしなどとは考えていなかったにちがいない。彼はそれをまさに「過渡的」なものとして考えていたからである。

なぜ彼がそれを過渡的と見なしていたか、その理由を次の「階級および国家の止揚」という思想に確かめることができる。ただし、その思想はマルクスとは思想的双生児と呼んでもよいエンゲルスの著作に重複して確認しようと仮定してのことだが。いずれにせよ、彼らが、階級闘争は必然的にプロレタリアート独裁に至り、それはついに無階級社会をもたらし、と共通に確信していたことは確実である。

階級および国家の止揚 そこで、エンゲルスが、唯物論者だがマルクスを批判したK・E・デューリングを、マルクスに代わって反批判した『反デューリング論』（1878年）を訪ねるが、そこに階級および国家の止揚ないし揚棄（Aufheben）の説が以下のように述べられる。

「プロレタリアートは国家権力を掌握し、生産手段をまずはじめには国家

的・所・有・に・転・化・す・る。だが、そうすることで、プロレタリアートは、プロレタリアートとしての自分自身を揚棄し、そうすることであらゆる階級区別と階級対立を揚棄し、そうすることでまた国家としての国家をも揚棄する」¹⁰。

ここに証言されているのは、驚くべき政治的社会的ユートピアニズムである。そして再びその背後に確認しうるのは、驚くべき楽観主義である。筆者などはこの下りを前にしてただ唾然とし、ある意味ではマルクスとエンゲルスの純粹無垢なる人間性信仰に対して自らのシニシズムを恥じ入るほどである。しかし、同時に、この無垢性とその後の共産主義社会、ひいては世界全体に、どれほどの恐怖と惨状と問題をもたらしたか、そして今なおもたらし続けているか、ということを想起するときに、この無垢なる理想主義の罪深さを思わずにはいられない。理想主義であれば即善である、ということにはならない。

マルクスやエンゲルスは、共産主義国家建設の後の、国家も止揚される理想社会をリアルに思い描き、信じたからこそ、そこに至るまでの「プロレタリアート独裁」を「過渡的」なものとして是認したにちがいない。しかし、この理想に対して現実はどうか。現実には、この理想社会が一向に実現しないという事実である。その事実とは、より具体的に表現すれば、マルクスが「プロレタリアートの革命的独裁」を暫定的なものとしてあれ承認した事実から必然的に結果した「共産党一党独裁」の継続の事実であり、そこからまた必然的に結果している「個人的独裁」の事実であり、それが理想的社会に向けて止揚解消される気配は一向に感じられないという事実である。

上述の1991年のソ連の解体の事実、この理想社会が実現されるどころか、共産主義体制そのものがそのヴィジョンどおりにはけっして機能しない、ということの巨大かつ深刻な証明であった。

プロレタリアート独裁→共産党独裁→個人独裁 以下はこの解体の3年後に伝えられた元ソ連外相シュワルナゼ氏の回想である。これはわが国のある新聞に掲載された。

「いい夢だった。…けれども、時間がたつにつれ、我々は共産主義に苦し

むようになった。昔の夢を再検討しなければならなくなった。共産主義そのものは立派な思想だと今でも思っている。しかし、実践に移してみると、これは間違いだった。共産党がなくなったのは本当に良かったと思う。権力の独占は色々な“歪み”を作り出した。一党独裁は必ず一人の独裁をもたらす。我々の社会もその通りになってしまった」(傍点は西谷の付加)。

ここにはマルクスの理想主義への評価とその実践の達成の困難性とが率直に証言されている。思想それ自体としては「立派」なのだが、それを「実践に移してみると…間違いだった」のである。すなわち、理想実現までの暫定的なものとされたプロレタリアート独裁は、その理想が達成されない現実によってかえって固定化され継続化され自明化され、共産党による一党独裁を正当化し、次には党の少数指導者らによる独裁を許し、彼らの間の権力闘争を経て、スターリン、毛沢東、チャウシェスクといった個人の独裁にまで至り、最後は、その独裁を維持するために悲惨な拷問殺戮を伴う恐怖政治さえ招いたのである¹¹。そして、これらすべての事実を正当化するために、かのマルクスの理想への訴えが臆面もなく繰り返されるわけである。

さらに驚くべきは、このプロセスが共産主義体制においては場所と時代を超えてほとんどステロタイプ的に繰り返されてきたし、繰り返されているという事実である。ここに共産主義体制の構造化された悪を確認することができる。**共産主義の構造的悪に対する憲法による保障** さらにまた問題なのは、この構造的な悪が共産主義体制においてはその最高法規すなわち憲法によって保障されてしまうという事実である。すなわち、国家指導の権力独占についてこの憲法曰く、共産党は人民の指導的中核であり、労働者階級は共産党を通じて、国家に対する指導を実現する。また軍事指導の権力独占について曰く、国家の武装力はこれを共産党中央委員会が統率する。さらに政治指導者および官僚の人事権独占について曰く、人事は共産党中央委員会の提議に基づきこれを決定する、云々。事ほど左様であるから、最高権力を掌握した独裁者においてはその権力のさらなる拡大が意のままに行なわれてしまうのである。それに歯止めをかける憲法上の規定は共産主義体制においては存在しえないからである。

アメリカ合衆国大統領を選任する主体はアメリカ市民であり、仮に大統領がどれほど独裁的になろうとも、その任期は憲法に規定されたとおり最長8年止まりである。「投票は弾丸よりも強い」(リンカーン)というデモクラシーが生きて機能し続けているからである。しかし、中国では独裁者自身が自らの任期を終身とさえ思ってしまうがままに憲法の規定を変更しうる。われわれはそれをつい昨年見届けたばかりである。そこで言う「人民民主主義」とは、似て非なる民主主義のことであるからである。

おわりに

以上のマルクス主義思想に対する筆者の批判的見解の根本的視点は、マルクスの「ユートピア的幻想」が不当な「権力独占」を正当化し、その抑止をまったく不可能としてしまう共産主義体制、ということであった。そのことは、冒頭でも触れたように、中国の現状において再確認することができる。いささか啞然とするほどの無垢さをもってマルクスが「プロレタリアート独裁」を公言した——もちろん、それは「過渡的」、暫定的という条件付きではあったが——ことが、その後の現実的な歴史過程ではかえって仇になったのだとは言えるとしても、ソ連崩壊を予期しその二の舞を必死で回避しようとした中国の体制固持の在り方は、マルクスにおける思想的汚点とは比べものにならないほど、正統的な共産主義教条に対してはきわめて不誠実なものであった。

すなわち、体制存続のためには共産主義の中核的教条と言うべき「計画経済」の原理をもあっさりと破棄し、「社会主義市場経済」と表面的には取り繕っているとしても、実質は自由主義経済に移行し、その上でなお、国家国民を支配する政治的権力は共産党一党のみが独占するという専制体制に固執し続けている。

この権力独占の悲惨な弊害は第二次天安門事件のような出来事においても証明されており、現在の「一帯一路政策」のような一種の世界支配政策においても確認することができる。その関連でカンボジアを一例として挙げれば、ポル・ポト政権下の惨禍を乗り越えて、1993年の民主選挙の成功以来、この国はフン

セン氏率いる人民党政権下、健全な立憲君主制国家を維持してきたが、近年の巨大な中国資本の受け入れにより、その民主主義は急速に実質を失いつつある。昨年の選挙で、議会の125議席はすべて与党人民党に独占されてしまい、野党救国党議員は完全に閉め出され、フンセン首相は一種独裁者の雰囲気醸し出している。巨大資本で他国を実質支配しようとするこの中国の政策の他の諸事例は、読者にも周知であろうゆえに、ここでの詳論は省くこととする。

ヴェーバーは、中国人には富は道徳的完成の手段として倫理的価値なのであり、従って中国ほど現世肯定的功利主義と物質的安寧とがこれほどまでに力を込めて人間の究極目標であると明言された文明国は他にはなかった、と述べた¹²。こうした中国人に古来根づいてきたマンモニズム¹³が、近年のその経済成長と相俟って、国家的品格を欠くほどの政策に移され、遂行されているわけである。しかし、そのマンモニズム以上に警戒され承知されねばならないのが、この政治体制に思想的実践的に巢食う「権力独占」の構造であり、それが内蔵する帝国主義的性格である。自由民主主義世界はこの脅威に対して再び一致して強力な「封じ込め」政策を取る以外にはないであろう。

【注】

¹ 学位論文「デモクリトスの自然哲学とエピキュロスの自然哲学との差異」、『マルクス＝エンゲルス全集』第40巻（大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1975年）、190～191頁。

² 私はその点をとくに私の神学の最後の恩師、チェコ人元バーゼル大学総長故J・M・ロッホマンから教えられた。J. M. Lochman, *Christus oder Prometheus?: Die Kernfrage des christlich-marxistischen Dialogs und die Christologie* (Furche-Verlag, 1972); *Marx begegnen: Was Christen und Marxisten eint und trennt* (Gütersloh, 1975)を参照されたい。

³ 「経済学・哲学手稿」、『マルクス＝エンゲルス全集』第40巻（大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1975年）、431～432頁。

⁴ ヘーゲル／竹田青嗣・西研訳『精神現象学』（講談社、2007年）を参照されたい。

⁵ フォイエルバッハ／出隆訳『キリスト教の本質』（河出書房、1954年）を参照されたい。

⁶ 「ヘーゲル法哲学批判一序説」、『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻（大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1959年）、415～416頁。

⁷ 「経済学批判」、『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻（大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1964年）、6頁。なお、傍点は西谷によるものである。

- ⁸ 「ゴータ綱領批判」, 『マルクス＝エンゲルス全集』第19巻(大内兵衛・細川嘉六監訳, 大月書店, 1968年), 19～21頁。以上の他の引用文もここから。
- ⁹ 「ゴータ綱領批判」, 『マルクス＝エンゲルス全集』第19巻(大内兵衛・細川嘉六監訳, 大月書店, 1968年), 28～29頁。なお, 傍点は西谷によるものである。
- ¹⁰ 「オイゲン・デューリング氏の科学の変革」(反デューリング論), 『マルクス＝エンゲルス全集』第20巻(大内兵衛・細川嘉六監訳, 大月書店, 1968年), 289頁。なお, この引用中, 最初の文の傍点は原書のもの, 第二の文のそれは西谷によるものである。
- ¹¹ この独裁の変遷発展形態については, R. Niebuhr, “Why is Communism So Evil?”, *Christian Realism and Political Problem* (Charles Scribner's Sons, 1953) を参照されたい。拙訳あり。青山学院大学宗教主任研究叢書『キリスト教と文化』第29号に掲載。
- ¹² ヴェーバー／木全徳雄訳『儒教と道教』(創文社, 1971年), とくにその第8章を参照されたい。
- ¹³ これについては, 加藤徹『貝と羊の中国人』(新潮社, 2006年)を参照されたい。

Lecturing on the Peril of Marxist Thought

Kosuke Nishitani

This essay tries to describe the contents of this author's lecture on the peril of Marxist thought. This lecture has been given to students of the School of International Politics, Economics and Communications and of the Graduate School of International Management of Aoyamagakuin University for last ten years.

This essay first explicates 6 points of Marxist thought, i.e., 1. Promethean Humanism of Marx, 2. Estranged Labor (Estrangement of Labor), 3. Religion as the Opium of People, 4. Historical Materialism and Class Struggle, 5. Surplus Value and Exploitation, 6. Proletarian Communist Revolution.

Then the essay points out the most problematical part of Marxist thought stated in Marx's *Criticism against the Program of the German Socialist Labor Party* (or *Criticism against the Gotha Program*) and in Marx's best friend, Engels' *An Argument against Karl Eugen Dühring*, saying that the proletarian dictatorship is provisionally approved until an ideal society is achieved where class struggle and even the state are abolished. Why this statement is problematical is because it is actually impossible for humankind to achieve such an ideal society. As a result the proletarian dictatorship is fixed as the communist party's dictatorship, which in turn leads to its oligarchic and finally individual dictatorship, i.e., that of the survived leader.

This is still real in communist countries of the present. So liberal democracies of the world are supposed to "contain" again such a perilous political system in close mutual cooperation.